

# 東方再記録

青い灰

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて、八雲紫を止めた者。

彼は能力の代償で存在ごと消滅した、筈だった。

これは、全てを取り戻す、彼の物語。

東方友好録、その終わった物語は再び始動する。

# 目次

序章 く再会を待つく	
プロローグ「奇跡」	1
再び取り戻すために	8
再会、楽園の素敵な巫女	12
再会、普通(?)の魔法使い	17
再会、伝統の幻想ブン屋	21
再会、宵闇の妖怪、そして希望	26
旅の始まり……………その前に修行	31
第1章 月の呪い	
新たな敵	35
再会、因幡の悪戯ウサギ	39
再会、赤目の兎と病床の姫	44

序章　く再会を待つく  
プロローグ「奇跡」

彼は、誰の記憶からも消え失せ、消滅した。

だが、奇跡が起きる。

気がつくとき、そこは真っ白な空間だった。  
そして、当たり前前のことに、オレは仰天した。

「い、生きてる……!!？」

声が出た。息が出来た。

それだけで、驚く。

そして、見えたモノに、身体が凍りついた。

それは、空を覆うであろう程の巨躯。

蛇のように長い身体に、手もある。

樹齢幾千の巨木すら敵わないとも思わせる太さ。

そして、恐怖。

見たことないものに恐怖するのは当然だが、

これは、違う。

遺伝子そのものに刻み込まれた恐怖。

原初の恐怖を、感じた。

「……………!!」

かかる重圧は凄まじく、

その大砲のような眼力に足がすくむ。

そして、それは口を開いた。

『見ていた』

「え……………?」

ひどく、安堵を覚えた。

ただ一言を聞いたただけに過ぎなかったのに。  
見ていた、とは。

『汝の行、見事なり。』

自身の存在すら顧みず、

よくぞ、暴走した八雲紫を止めた』

「……………」

「労われているのか？」

「いや、感謝か？」

「こんな存在が、オレなどに、何故？」

『問に、答えよう。』

道を踏み外した八雲紫を止め、

幻想郷に生きる者の未来を示したが故』

「……………そんな、大層なことをやったのか？」

『汝は、完遂した。』

力の代償に、存在は消えたが』

「力……………あの青い光か」

幻想郷で何度も使った力。

名前は、運命を破壊する程度の能力、だったか。

『そうであり、そうでない。』

「汝の本来の力の名は、 “叶える程度の能力”」

「叶える程度の能力……………?」

『我が力の一端であり、

文字通り、全てを叶える力』

「す、全て!?!」

「またもや仰天する。

そんな凄まじい力だったの、アレ!?!」

『汝は我が思想を越えた。

それ故に、全てを話そう』

「全て、って……………?」

『汝が外の世界と呼ばれる世界で死したのは、

我が目的の為だ』

「ぶーっ!?!」

「あっさりと答えるそれに噴く。

つまり、オレは殺されたのか!?!」

『隠しはしない。そうだ。

八雲紫を止める為、汝に我が力の一端を預け  
半死半生でスキマに無理矢理にねじ込んだ』

「まさかのパワープレイだった!?!」

『八雲紫の気紛れにより、  
汝は幻想郷へと侵入した』

「……………もしかしたら死んでたのか、また」

『そして、図らずとも二柱の神を救った。  
水神を記憶しているか』

「水神……………ミズ、蛟様のことですか」

『構わぬ。敬語である必要も、  
愛称であることも汝は許される』

「は、はあ……………」

『良き名を貰ったものだ、我が娘は』

「へー、娘さん……………ファツ!？」

マジで!?

多分この人(?) ってアレだよな!?  
娘、娘だったの!?

『如何にも。神は信仰を得るためには  
他の神はいてはならぬ。

それ故に、見捨てるしかなかったが』

「それを、たまたまオレが助けた？」

『肯定する。見捨てるしかなかったとはいえ、  
親として子の命を助けた者に、感謝しよう』



「た、たまたまですから!？」

『たとえ偶然でも………む、話が逸れたな。』

話を戻すが、結果的に汝は八雲紫の間違いを正し、そして未来を示した』

すごい無理矢理話を戻したな………

「……………」

『汝を手駒として幻想郷に送ったこと。』

どうか、許してほしい』

「……………いえ、やりたいことをしただけです。』

オレは、やるだけやって満足しました」

『……………そうか。だが、それは誠か?』

「……………悪い、嘘言った。』

満足なんて、まだしてない。できない」

『なら願え。その枷を解き、』

汝を再び世界に呼び戻さん』

できるのか、ではなかった。』

やるんだ。』

帰る。皆のところへ。』

幻想郷へ。』

これは、失ったものを取り戻す、彼の物語。

## 再び取り戻すために

光に目が眩む。

どうやら気を失っていたようだ。

目を慣らすと、そこにあっただのは雲一つない青空。

意識を覚醒させ、ゆつくりと起き上がる。

「……………どこだ、ここ？」

オレは静かな平原の上に寝転がっていた。

周囲には鈴蘭が咲き誇っている。キレイだ。

確認すると、服は幻想郷でオレが使っていたもの。

護身の短刀も懐にあった。

立ち上がる。

遠くに、大きな山が見えた。

——えっ、まさか。

「妖怪の山、遠くね!？」

妖怪の山がかなり遠い。

おそらく来たことのない場所だ。

大量の向日葵が咲き誇る丘も見えた。

太陽の丘か。

「えらい遠くに来ちゃったな……………」

ただでさえ太陽の丘に着くまで2日かかったのだ。

オレは飛べないし。人間だし。多分。

と、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「春ですよー」

「この呑気な声は……リリーホワイトか！」

「呑気で悪いですねー、ていうか誰？」

現れたのは掌サイズの妖精。

春告精とも言われる春を告げる妖精、

リリーホワイトだった。

幻想郷の春では風物詩である。

「誰って……あ、そうか。」

初めましてだな、オレはソラ。よろしく」

「幻想郷の新入りさんですか？」

私のことは知ってるみたいですけど」

「ちよつと前に幻想入りしたんだ」

「よくこんな不吉な場所まで来ましたねー。」

ホントに幻想入りしたの最近なんですか？」

不吉？

顔をかしげる。

「知らないんですか？」

「ここ、昔は人間の問引きやってたんですよ？」

「問引き!?!」

「こ、子供をここで!?!」

「そうですよー、まあ

こんなところまで来る私もですけど」

「まあ確かに……あ」

と、聞かないといけなことを思い出す。

危ない危ない、これだけは聞いておかないと。

「最近、幻想郷で

行方不明になった人っていないか？」

「……………聞いたことないですねー？」

私、春告精として家々は回りますが、

どこもそんな場所はありませんでしたよ？」

「……………そか、サンキュー」

「さんきゅー？」

「ありがとう、の意だよ、リリーホワイト」

「そうですか、どういたしましてー」

それでは私はこれで。はーるでーすよー」

飛び去っていくリリーホワイトを見送る。

なんか焼芋売ってる車みたいだな……………

「ともかく、オレを覚えてないっぽいな」

確認ができた。

悲しいがやはり、オレを覚えてる人はいない。

リリーホワイトとは何度も会っているの

確認はできた。

「……………人里に向かうのはやめとくか」

そう考える。

慧音さんたちに不信がられるのは避けたい。

前は咲夜の紹介があつた訳だしな。

……………建前だ。

本当は、自分を忘れて初めて会うように  
接してくる皆が怖い。

自分だけが外れた世界は、  
どうしようもなく、怖かった。

頬を叩き、気持ちを入れ換える。

「……………っし、博麗神社だ。

金はあるっばいし、霊夢に会いに行こう」

店には戻れない。

なら有り金使ってしまったても霊夢が  
嬉し泣きするくらいだろう。

かかる時間は、おそらく半日くらいか。

オレは、博麗神社へと向かって歩き出した。

## 再会、楽園の素敵な巫女

「あゝあゝ……………疲れた……………」

飛べないとやはり、

神社までのクソ長い階段がキツイ。

半日歩き、何とか博麗神社に辿り着くことができたが階段を登りきったところで膝をつく。

「半日歩くだけでしんどい

……………能力も使ったらキツイし」

もうやだああああ、と顔をあげる。

と、そこにいた脇が空いている巫女と目が合う。

「……………」

「えっと、霊夢さん？」

「……………」

掃除中だったのか箒を持ってこちらを

ポカーンとしながら見つめる霊夢。

「……………」

「おーい」

「……………」

目を擦る霊夢。いや何してんだ？

そして、凄まじい速度で接近され顔を

両手で挟まれる。

「ちよつと私を叩いてくれない?」

「流石に叩くのは……………えい」

「いふあい……………」

霊夢の頬を引つ張る。

霊夢は呆然としたまま動きを止める。

つーかモチモチだな。

女の子の肌ってこんなベタベタ触っていいのか?

「夢じゃないわ!!」

「うおわ!?何事!?!」

いきなり霊夢に押し倒される。

えっ?!

「霊夢……………流石に昼だし外だぞここ」

「そのアホみたいなセリフ!!」

ソラよね?!良かった、生きてた!!」

「なんか傷つく」

霊夢がオレに馬乗りになっているのは

ちよつとお見せ出来ないというか……………

「ていうか、覚えてるのか!?!」

「ええ……………ええ!!」

あんたがどこにもいないし、

皆、あんたを忘れてるから……………!」

「あー……………心配かけた、わりい」

「馬鹿あつ……………!」

抱きつかれる力は苦しいレベルだったが、



それでも、暖かった。

霊夢の顔は……………いや、

彼女の名誉のためにも黙っておこう。

軽く、彼女の頭を撫でた。

〜数分後〜

「……………悪かったわね、出会い頭に」

「まあオレも抱きつきたくなっただし」

「はあ!？」

「いや、覚えててくれたからな。

霊夢の言う通りみんな忘れてんだろうし。

なんつーか……………うん、嬉しかったから」

「むう……………」

頬を膨らませる霊夢。

何とか霊夢を落ち着かせ、オレたちは

神社の中へと入った。

……………何もしてないからな!?!マジで!

「はあ……………まあいいわ。

それにしても、2年も音沙汰ないから……………」

「はっ?」

「え?」

「今、2年音沙汰ないって言ったのか?」

「……………自覚なかったの?」

「つか死んだぞ、オレ」

「……………」

「今は生きてるからな!」

黙って御幣を構える霊夢を慌てて制止する。

いや、生きてんのか、オレ。

「まあ、生きてるわよ。

「だけど……………何て言うか、違和感があるのよね」  
「んん?」

「むー……………この感じ……………ああ、成る程。

「だから私はあんたの記憶があつたのね」

「1人で納得してないで教えてくれよ」

「ええ、今説明するわ」

霊夢曰く。

今のオレは“浮いている”状態なのだとか。

霊夢の能力、“主に空を飛ぶ程度の能力”に  
関係しているらしく、霊夢はオレと同じ状態に  
なることができるとか。

「つまり、どゆこと?」

「そうね、言い方を変えるなら

この世界から浮いている、つてこと。

皆の記憶がなくなったのも、

あんたがこの世界から浮いたから」

「ほー」

「まるで、存在そのものが消えたみたいね……………」

その言葉に、少しひっかかる。

確かに、オレの存在そのものが消えた。

それは魂の消滅によるもので、……………そうか、  
一度死んだから、か！  
存在が浮いているのか、未だに。  
本来ならオレがこの世界に現れた時点で  
皆はオレを思い出す筈だ。  
だがオレの存在が浮いていたせいで  
皆は記憶が戻っていない。

「確かに、それなら霊夢が覚えているのも納得だ」  
「ええ、私も浮いているから。  
ソラ、あんたも何があったのか話さない」  
「ああ」

オレは、八雲紫との戦い、  
そしてあの龍神との話を霊夢に話す。

## 再会、普通(?)の魔法使い

「はー……………何て言うか、あんたすごいわね」  
「語彙力なくなるよな」

簡単に省きまくって説明しても語彙力がなくなる。  
人里の中心にも龍神の像があつたな。  
目の色で明日の天気予報できて便利だった。

「それもだけど、紫を倒すのも、よ」  
「もつと褒めてもいいぞ?」

「馬鹿みたい」  
「霊夢さんそれ罵倒だからね?」

まあ霊夢は覚えてたつぽい。  
しかし、やはり博麗神社では……………  
ガラリと扉が開く音が聞こえる。

「霊夢ー!」  
腹減ったから飯食いに来たぞー!」  
「案の定」「噂をすれば、つてやつね」  
「失礼な奴らだな……………ん?」  
片方、見たことない顔だな、知り合いか?」

箒を持ち、大きな黒い帽子を被った少女、  
自称、普通の魔法使い。  
霧雨 魔理沙がやって来た。  
見たことない顔、か……………  
やはり、少しくるものがある。

「……………まあ、だよな」

「ん？」

「元気出なさい。」

魔理沙、あんた会ったことあるわよ、こいつに」

「ん……………お前名前は？」

「ソラ、オレは魔理沙、お前を覚えてるぞ」

「あー、聞いたことあるような……………ないような」

うーん、と頭を抱える魔理沙。

……………やっぱダメか。

「……………ま、仕方ないわね。」

説明してあげるわ……………その前に」

「おう、その前に、だぜ」

「んっ？」

2人がオレを見て目を光らせる。

「飯（だぜ）よ」

まさか来て早々に食事係とは……………

渋々、河童印の炊飯器から米をよそう。

「うーん、美味しい!」

「どっかで食べたことあるなあ、やっぱり。」

「まあ今は旨いからいいか!」

「……………まあ、2人が美味そうに

食べているのでそれでいいか。」

「魔理沙の味噌汁のおかわりを注ぐ。」

「決めたわ、ソラ」

「うん?」

「あんた朝昼晩、ここで飯作りなさい」

「ええ……………やだよ、面倒くさい」

「自分でやれよ。」

「どうせ住む場所もないんでしょ、

ならここに住みなさい。」

「それとも夜に野宿するのかしら?」

「うぐ……………」

「なんだ霊夢、同衾か?」

「違うわよ!!」

「そんな激しく否定しなくてもよくない!」

「傷つくからやめろ?」

「っーか同衾って……………」

「魔理沙も少し大人っぽくなったか?」

「まあ2年だしな。」

「変わるもんも変わる、か。」

「霊夢も少し身長伸びたっぽいし。」

「でも脇がなあ……………守りが甘い。」

「目の毒だよ、成長した少女が脇巫女服とか。」

不健全だよ。

「……………?」

ソラ、どうかしたの?」

「いや別に?」

「そう?」

「ソラ、霊夢に気があるんじゃないのか?」

「あんた最近そういうのにうるさいわよね」

「そうか?」

……………多分、2人も15か16くらいだろう。

外の世界ではその辺りの知識は知ってるからなあ。

魔理沙が色恋とかそういうの

喋ってもおかしくは感じない。

早苗とかは特に大歓喜しそうだなー。

ただオレを忘れてガールズトークはやめろ。

「話、戻すけど

ソラ、あんた家はどうするのよ?」

「んじゃ居候させてもらうか。

そう言うことで、これからよろしく」

## 再会、伝統の幻想ブン屋

目を覚ますと、そこにはカメラを持った  
黒髪の美少女が目の前にいた。

「おはようございます！」

清く正しい射命丸でござりますよー！」

「朝から騒がしいの変わらねえなお前」

思えば死ぬ前も初めて会ったとき

こんなんだったような。

布団から引きずり出され、起こされる。

朝起きたら目の前に美少女が……………

つてのはロマンだが。

幻想郷って美少女しかいないから

ありがたみ薄れる。

「あやや？どこかでお会いしましたっけ？」

「……………だよ、なあ」

「？」

やっぱ傷つくな……………

切り替えが大事だ、切り替えろ、オレ。

頬をパシッと叩く。

「取り敢えず名刺をどうぞー」

「あ、いや持ってる。射命丸 文、だろ」

懐から文から貰った名刺を取り出す。

幻想郷では名刺なんて珍しかったから



持っていたのだ。  
改竄されまくりの文の新聞だが、  
こうやって名刺をちゃんと渡したり、  
毎日必ずと言っていいほど新聞を持ってくる。  
根は真面目なのはよく知ってる。  
酒を飲んで嫌というほど愚痴を  
聞かされたのも今となってはもう  
戻れない過去の話だ。

「あやや？名刺を持ってるってことは  
やっぱりお会いしてますよね？」  
「拾ったんだよ。お前、有名だから」

魔理沙の時は思い出せないものかと  
苦難したが、もう諦めた。  
霊夢が何か言いたそうな顔をしてたが、  
おそらく覚えてるのは霊夢だけ。  
思い出させる方法もないのだ。  
諦めるしかない、と、そう思った。  
またゼロから距離を縮めていけばいい。

「でへへー、そうですかそうですか、  
ではご存知かと思いますが、私、新聞記者を  
やっていまして……取材、よろしいですか？」  
「いいよ、どうせなら飯も食っていけばどうだ？」  
「おぉー、いいですね。」

博麗神社の朝食も記事にできますー！  
「着替えるから霊夢のところにでも行っててくれ」  
「了解ーす」

文が部屋から出ていく。

………こうも話がスムーズなものも、  
前の名残なんだと思うと少し辛い。  
ともかく、朝飯を作るために着替え、部屋を出る。  
霊夢が言うには無駄に使わなければ  
冷蔵庫の中身は自由にしていいとのこと。

「んじゃ、いっちょやりますか!」

料理をしよう。

朝食はエネルギー源だ。

食ったら力が湧いてきた! って

どっかの滅竜魔道士も言ってたし。

「あら、今日は鴉の唐揚げにするの?」

「私食べる気ですか霊夢さん!」

「鴉天狗って美味しいのかしら」

「そんなこと言うのは

あの夜雀だけにしてくださいよ!」

哀れミスティア、

まさか霊夢と文にも食物認定されていたとは……………

幽々子さんが涎垂らしてたが、

ミステイアはやめところ、な？

夜な夜な響子と歌ってたのも

そのプレッシャーからだった可能性が……………？

「ミステイアはともかく、あの鰻だけは……………

いやミステイアも見捨てたらダメだよオレ」

「ごーはーんー」

「ハッ……………悪い悪い」

霊夢の声に我に還り、

持っていた食器をちやぶ台に並べる。

文も律儀に座っている。

「なんでしよう、見たことない料理ですね」

「そうね……………」

「外の世界のだからな」

豚肉をスライス、塩漬けしてベーコンに。

その上に目玉焼きを乗せ、

そしてウインナーの代わりに

羊肉を薄く切って焼いたもの。

野菜は幻想郷ではもっぱらお浸しなどだが、

今回は余っていたトマトなどを使ってサラダに。

マヨネーズを薄く塗って臭みを消した川魚の

小さな切身も混ぜてある。

そして茶碗ではなく皿にご飯は盛った。

そう、幻想郷で味わえるのはここだけ!!

「洋食……………breakfast、だ。召し上がれ」

「いただきますっ!!」

ネイティブに朝食を宣言。

さらにカツコつけて決めポーズ。

だからねえ2人とも、朝食に夢中になつてないでこつちを向いてツツコミ入れるとかして？

## 再会、宵闇の妖怪、そして希望

食事を終え、縁側でオレと茶を飲んで  
一息ついた文が立ち上がる。

「さて、と。私はそろそろ行きますね。」

今日はまた面白い記事も書けそうですし」

「待ってくれ文、1ついい?」

「はい?」

「お前の新聞に俺の名前も出してくれないか?」

もしかしたら知り合いがいるかもしれない」

「構いませんよー、名前出しておきますね」

文は翼を広げ、風を操って飛翔する。

そして凄まじい速度で飛んでいってしまった。

自称とはいえ、

彼女は確かに幻想郷最速なのかもしれない。

神社の裏手の方から霊夢がやって来る。

手には箒、そして洗濯かご。

そしてオレへと箒を差し出した。

「手伝いなさい、食後の運動よ」

「それを言うなら食後の雑用だろ……………」

わーったよ、どこすればいいんだ?」

「裏手をやってちょうだい。」

見ての通り、落ち葉が多いのよ」

「へいへい」

箒を受け取って神社の裏手へと回る。

すると、見覚えのある人影が。

まるでこちらを待っていたかのように  
こつちを見据えていた。

「ルーミア？」

「……………ああ、そうね。」

確かに、そうだったわね」

「？」

「久しぶりね、ソラ」

「久しぶり……………つて!？」

「覚えてるのか!？」

頭痛でもしたのか、頭を押さえたルーミア。  
そして、彼女はそう言った。  
ということは、まさか。

「ええ、少し話があるわ」

どうやらルーミアはオレのことを  
待っていたようで、霊夢に裏手に来るよう  
伝えたらしい。  
掃除はついでかよ。

「思い出した……………つて言ってたけど、  
本当にそうなのか？」

「魔理沙は完全には思い出せなかったけど」  
「本当よ。」

「私はあなたに大きく関わった1人だし。  
あなたに与えられた影響が大きすぎたから」  
「そんなにか?」

「そんなに、よ。」

でも実際、あなたが顕れるまで

私は完全にそのことを忘れていたわ。

3日前、あなたは再び幻想郷に顕れた、でしょ?」

「3日前、だな」

ということは、オレが生き返った影響かな。

うん、待て。ならば……………」

「まさか、みんなも

思い出し「それはないわ」否定が早えよ!?!」

結構本気だった希望観測を

冷酷な即座否定で心が砕けそうだよ!?!

お前そんなだったっけ!?!

「思い出した、とは言っても

おそらく偶然よ。これを見て」

「ん?」

ルーミアが手を差し出してくる。

その手の内にあつたのは、

いつか、オレが幻想郷に来たばかりの時、

助けてくれたお礼にあげた飴玉の袋だった。

「お前よくこんなもん持ってたな……………」

「……………」

「えっなにその長い沈黙怖い」

「何でもないわ」

溜め息つくくなよ……………」

分かんねえ、オレ何かしたっけ?

ダメだ、分かん。

「ともかく、私が思い出せたのはあなたに関わるものを持つていたから。おそろくだけど、あなたとの関わりが大きい過ぎる者は記憶にブレが生じるのよ」  
「……………じゃあ、もしかしたら」  
「ええ、私はこれで断片的に記憶が戻って、それからあなたを探した。そして会った。そうしたら完全に記憶が戻ったわ、鮮明に」  
もしかしたら。

「あなたが顕れた、関わりが大きい、そして見る。その要因が全て揃えば、きっと。

あなた、皆との関係を取り戻したいんでしょ？」

「ああ、だけど……………他の、皆は」

「諦めるには早いわ。

会ったことがある、話をした。

たとえそれくらいでも記憶は完全に消えない。

ならその記憶を強制的に呼び起こせる者に、

あなたは会ったことがある！」

そうか、諦めるのは早すぎる。

確かに彼女なら。

「いや、でも紫は……………！」

だが、彼女、八雲紫はここ2年、姿を見せていないと霊夢から聞いた。

「八雲紫を探すわよ、ソラ。



馴染みとして、あなたも来なさい。霊夢」

「はいはい、仕方ないわね……………」

2年間、待つのに飽きたところよ」

霊夢が渋々と言った様子で裏手に回ってくる。  
いないなら探せばいい、という単純な作業か。

「言っておくけど、私が幻想郷中を

個人的に探し回ったけど無駄だったわ。

だから、長い旅になる。

——幻想郷、端から端まで探すわよ」

「ごめん……………いや、ありがとう、2人とも。

恩は必ず返す。記憶と紫を探しに行こう。

失くしたものを取り戻しに、幻想郷ツアーだ」

「長いこと留守にするんだから

裏手の掃除ちゃんとしなさいよ」

「良いところだったよね今!?!」

旅の始まり……………その前に修行

「そういえば、あんた置いてくからね」  
「何故に!？」

唐突に夜食中に切り出され、  
米を吹き出しそうになる。  
なんでき。

「……………ああ、そういえば飛べないのよね」  
「えっ徒歩じゃないの?」  
「あんた前に私を何から守ったのよ」  
「やめてくれよトラウマなんだよ」

死ぬ前、八雲紫との決戦前に  
霊夢を妖獣どもから守ったんだった。  
つーかトラウマもんだよあれ……………  
全身の肉を引き千切られる感覚最悪だし。  
よく考えたらオレって生命力すごくない?

「よく生きてたな……………」  
「往生際が悪いつてことでしょ」  
「言い方もつとあるよね!？」

なんか扱い雑になつてないかなあ!?  
最初に飛び付いてきた霊夢はどこへ!?  
頬を引つ張るなあ!

「いひゃい」  
「あの時のことは忘れなさい」

「ツンデ霊夢」

「忘れる！」

「ぐへあ！」

解せぬ。

「だから飛べるようになるのよ」

「一朝一夕でオレがそんなこと出来るとでも？」

「知ってるわよ」

「酷くない？」

「ちよつとくらい否定してくれてもよくない？」

というわけで、飛べるようになるために修行だ。

とはいえ、オレ、普通、人間。

人間は普通は空を飛べない。OK？

「行ける気がするのよ」

「うわーい何その意味も」

理由もすつからかんの動機。オレ死ぬよ？」

「いいから……………」

「うおわっ!？」

霊夢に背中を掴まれる。

待て待て待て待て!?

この先階段でこっから投げられたらオレ死ぬっ!  
やめろオ!!

「行けッ!!」

「ぎやああああ!!」

身体から重さが消え、空中に放り投げられる。

あつ、オレ死ぬな。

走馬灯が頭の中を駆け巡る。

短すぎる第二の人生だったなあ……………

「ソラ！宇宙をイメージしなさい！

無重力の感覚を強めるような感じよ！」

「オレ宇宙行ったことねえー!!」

「やればできる!!」

「んな無茶——いや待てよ?」

待って?

オレってばレミアの

グングニルも劣化複製できるよね?

ならばあれでいけるのでは?

「できるでできるなんでもできる!!

写輪眼！見稽古！水影心！

まねっこ！コピー能力！トレース・オン！

幻想片影！青魔法！完全無欠の模倣！」

「なにその呪文!?!」

身体中に力を込め、

ルーミアに言われた通り宇宙をイメージ。

霊夢たちの空を飛んでいる所を再現する。

飛べよおおお!!! (懇願)

瞬間、身体が重力を感じなくなる。

オレは、階段に落ちるギリギリの所で

何とか宙に浮くことができていたのだ。

「はあ、はあ、はあ……………いけた」

「おお……………」

「流石ね」

こうしてオレは飛ぶことができた。  
のだが。

「霊夢う……………もうちよつとやり方考えよう……………」

「できたじゃない。」

あと私の勘は百発百中よ」

「実際そうだから困るんだよ……………」

取り敢えずこれで、オレは空を飛ぶことに成功。  
改めて紫を探すために幻想郷を旅すること  
なるのだった。

## 第1章 月の呪い 新たなる敵

「さて、そろそろ行くわよ」

「別にいいんだけどさ、

なんで襲ってくるような奴らがいのの？」

「知らないわよ。

こつちが聞きたいくらいだし。

ていうかコイツら月の兎の筈なのになんで……？」

俺たち3人は、博麗神社で包囲されていた。  
わけがわからないよ。

しかも銃向けられてるし容赦なく撃ってくるし  
これ殺しにかかってたよね!?

あ、過去形なんで（霊夢が）全滅させました。  
誰も死んでないんで問題ない。うん。

「どうすんだよ、これ。

神社に放置すんのか？」

「その辺に捨てときゃいいでしょ」

「雑。……………それにしても、なんで月が……？」

ルーミアが首を傾げる。

俺も聞きたい。つか月、月ねえ……………

鈴仙とかに少し聞いたが、

月の裏側に人とか兎が住んでるらしい。

別に興味ないし「ふーん」って感じだが。

「別に興味ないわ。」

邪魔するなら適当に倒すだけよ」

「流石1人で無双した奴が言うのと安心するな」

霊夢がお祓い棒を肩に乗せながら言う。

兎たちは霊夢が1人で殲滅した。

俺? いや、俺ってば戦えるけど代償がね?

女性に戦わせるのもあれだと思っけど、

銃持ちの兎兵10人以上を単騎で

殲滅できる女子なら流石に任せるよ?

「また襲われても困るし、縛るか?」

「なら殺そうかしら」

「神社が汚れるでしょうが」

「違うそうじゃない。」

お願いだから人道に戻って」

発想が完全に妖怪だよ。

あ、言ったやつ妖怪だったわ。

もう片方が人間だったのも問題だよ。

やめてあげてください。

「ルーミアさんお願いだから待ってください」

「何? 敵は排除した方がいいわよ」

「事実、こいつら殺しに来てたけど。」

あんたそれは甘いでしょ」

「あつやべえ確かになって思った……」

と、取り敢えず待ってくれ。どうするか……」

うーん、月の兎……あつ。

永遠亭あるじゃん。

あそこなら引き取ってくれそうだ。  
俺はその考えを2人に伝えることにした。

「よし、永遠亭なら預かってくれるだろう」

「……………確かにね。」

あの医者なら実験台にでもするでしょ」

「あっ結末が同じだ……………」

「もうそれで良いわよ面倒くさい」

同じく面倒になってきたので渋々頷く。

というか、初飛行で永遠亭まで行くのか。

途中で落ちて死にそう。

「ていうか、永遠亭までどう運ぶの?」

「こうする」

ルーミアが手をかざす。

すると彼女の能力によって闇が兎たちの下を覆い、

ドボン、という沈むような音と共に

兎たちは沈んでいった。

「……………死んでないよねそれ?」

「死んだらその時じゃない」

「可哀想」

もうそんな感想しか出てこない。

苦笑いしていると、

いつの間にか消えていた霊夢がガラガラと

家の入口の戸を閉めているのが見える。

その背中には唐草模様の入った

大きめの巾着を背負っている。



「霊夢、なに背負ってんだ？」

「お茶とお菓子」

「遠足気分!？」

「あとは御札とか色々よ。」

準備はこんなもんでいいと思うわ」

「……………まあそうか。それにしても……………」

なんで襲ってくるような奴がいんだよ」

「さあね、とにかく敵がいるのは分かったわ。」

月のことなら永遠亭の連中も

協力してくれるはずだし、さっさと行きましょ」

「……………」

そうして、俺たちは永遠亭へと向かう。

幻想郷に再び、

不穏な影が忍び寄っていることに

もはや誰もが気づいている。

無くした記憶。

行方不明の八雲紫。

月の襲撃。

謎は多く、深まるばかりだが……………」

幻想郷を巡る旅は、こうして始まったのだった。

## 再会、因幡の悪戯ウサギ

「ほんと、男の癖に情けないわね」

「男より女が強い幻想郷で

それを言っちゃいけないと思うよオレ」

途中で霊力が切れかかり、落ちそうになったので  
ルーミアが闇を束ねた縄で簀巻き状態で  
体を吊られて人里の空を飛ぶ。

霊夢の言い分は確かで情けないが、

この運び方されてるのに文句の1つは言いたい。

「……………そういえば男の虐殺があった、

って紫が言ってたよな、霊夢は知ってたのか？」

「知らない。多分私が生まれる前じゃないの？」

「妖怪同士のいざこざがあったのよ。」

あの頃には紫はおかしくなってたから、

その妖怪たちも消されたわ。

……………ソラ、遅くなっただけど本当に、ありがとう」

ルーミアの微笑みとその感謝に思わず

こっ恥ずかしくなり、そっぽを向いて

ブツブツと言う。

改めてだが、こうして感謝されるのは慣れてない。

自分がしたことは紫を止めただけだ。

「恥ずかしいっつーの……………大したことはしてねえよ」

「十分過ぎるくらいに大したことよ。」

300年の狂気に陥った最強の妖怪を、存在ごと消えかけになってまで止めた。

それは幻想郷の存亡にも関わること。

貴方は直接的に、幻想郷を救ったんだから」

「恥ずかしいって……やめてくれ。

やりたいことをやっただけだったの。

救いたいのには幻想郷じゃなくて紫だったしな」

「謙遜しないで受け入れりやいいのよ、

幻想の賢者にもなれるような偉業よ」

霊夢の素っ気ないその言葉に、

聞いたことのないワードが混じっていた。

話題を変えたいので、

それについて聞いてみることにする。

「幻想の賢者、つてのがいるのか？」

「ええ、幻想郷を創った存在のことよ。

もしくはそれと同格の偉業を成した者のこと。

私が知ってるのは紫と摩多羅 隠岐奈ね」

「またら……摩多羅神か。

改めてだけど、ヤバいな幻想郷……」

「あら、知ってるの？」

「外の世界の時にな。

ウチの近くに神社があつて、

そこに祀られてるのが摩多羅神だった。

天狗避けの呪文とかもあつたなあ、懐かしい」

「教えなさい。あの天狗を追い払えるわ」

「嫌です。文が可哀想だし」

懐かしい気分浸っていたのに台無しだよ。

ちなみに呪文は『け現にやさ娑婆なむ』。

経を読むと更に効果は高まるのだそうだ。  
「というか経を読む前提なのだが。」

「紫は狂気に堕ちても、

その思考力は失わなかったわ。

真っ先に対処したのがその摩多羅隱岐奈よ」

「へえー……やっぱ凄い神様なんだな」

「秘神は後戸の国って異次元にいるの。」

そこを突かれて幻想郷と断絶されたらしいわ。

紫が対処したとはいえ、顕現できないだけ。

各地の様子を覗いて干渉するのは容易なハズよ」

「それに確か、生命の真の能力を

引き出す力もあったわね、あの神様」

「紫の断絶を越える干渉力に

生命体の真の力を引き出す、ねえ……ん？」

と、ここで紫の能力を少しでも緩和できる

存在がいることを知ったワケだが……

少し気がかりな点があったのを思い出す。

紫との戦闘の時、紫を蹴り飛ばした。

あの時、紫の能力で消滅されるとばかり思ったが。

白玉楼での妖怪桜との戦闘の時の、模倣の力。

あんなご都合主義な勝利があるかと思っただが。

「……………まさかなあ」

そんな話をしながら、

オレたちは迷いの竹林へと辿り着くのだった。

「さて、ここからは徒歩ね」

「あれ、竹林の上を飛んでいかないのか？」

「無理。妖精どもの

悪戯で方向が分からなくなるのよ。

それに、ほら。竹林の上の霧が見える？」

「霊夢が指差す方向………竹林の上を見る。

そこには妖精の湖もかくやと思うほどの  
濃い霧がかかっている。

そして、霊夢の手が肩に触れる。

そこから流れてくるのは霊力だ。

「目を凝らして見てみなさい」

「おう………っ!？」

なんかいた。

こちらを凝視するその巨大な怪物は、  
爛々と輝く真紅の双眸を

霧の中からこちらへと向けている。

凄まじい悪寒が背筋を駆け上がる。

紫と同格、もしくはそれ以上の威圧感だ。

霊夢が手を肩から離す。

すると霊力が抜け、化物は霧で見えなくなる。

「分かるでしょ、あれは駄目よ」

「霧の、怪物………か………こっわ………」

「ま、ソイツに会わないようにね。」

あたしがいるから安心しなよ、3人とも」

そして、それはするりと、

まるで最初からそこにいたかのように

会話に入り込んできた。

そちらを向くと、小柄な兔の少女がいた。

癖っ毛のあるショート黒髪に、

半袖のピンク色のワンピース。

首からはニンジンの首飾りを下げている。

「よっ、ソラ。久しぶり。」

その2人は博麗の巫女に闇の妖怪だね?」

彼女の名は、因幡てゐ。

この迷いの竹林の主として住み着く兔の少女だ。

彼女の言葉に、驚愕する。

「てゐ……………お前、オレ覚えてんのか!」

「まあねー?…さて……………お役目を果たそうかな。」

永遠亭に行きたいんでしょ?案内してあげる」

そう言って、彼女は悪戯っぽく笑う。

## 再会、赤目の兎と病床の姫

竹林を歩く。

鬱蒼とする竹林と薄くかかる霧が視界を奪い、方向感覚を狂わせるが、

今はてゐの案内でなんとかなっていた。

「あれから2年、竹林も少し色々あってね。

いや……………幻想郷全体がおかしくなってる。

それは2人も知ってるだろ？」

てゐの言葉に2人も頷くが

勿論オレは知らないので首を傾げる。

だが、確かに幻想郷の管理者の八雲紫が

行方不明なのは異常事態だろう。

後ろを歩くルーミアが口を開く。

「伝えてなかったけど、

行方不明なのは紫だけじゃないのよ」

「え、そうなのか？」

「その他にも河童とか天狗とかね。

問題なのは、あの花妖怪ですら消えたこと」

「……………幽香が？」

その言葉に驚愕する。

幻想郷でも強さを信頼できる1人が幽香だったし、

太陽の丘の花を世話する役目がある彼女が

行方不明とは考えられない。

驚いていると、後ろで霊夢が溜め息をつく。

「吸血鬼とか冥界の幽霊とかも同じよ。

結界の見張りは私がないといけないし、  
全く……………面倒で仕方ないわ」

「レミリアに、幽々子さんまで……………？」

ていうか霊夢、おめー心配とかしないのかよ」

「幻想郷は何度も異変が起きてるのよ？」

そのうち帰ってくる……………と思ってたけどね。

流石に2年も仕事放って

帰ってこないのは私が面倒だし」

「……………あぁ……………お前が

手伝ってくれるのそんな理由だったか……………」

正直、霊夢なら

『そのうち帰ってくるだろうし放っておけば？』

探しに行くのも面倒だし』

と言うとでも思っていたがやはりか。

仕事やるより探した方が楽と思っただのか…………

「竹林も、あの月の医者が消えたよ。

それにタイミングも悪くて……………色々あってさ。

私も見過ごせない。助けてほしいんだ」

「永琳さんまで……………それは置いておくけど、

助けてほしいって何かあったのか？」

「……………ここまで来たなら見た方が早いね。

ほら、着いたよ」

すると、竹林の中に屋敷が現れる。

霧はそこだけ少し晴れており、見晴らしも良い。

そのまま玄関へと進む。



「ここが永遠亭だよ……………下がってて」

「え？なんで？」

「いいから。とにかく戸の真ん中にいないで」

言われた通りに戸から離れ、

てるが中から見えないように戸を開く。

その瞬間だった。

「うわっ!？」

家の中から突如として弾幕が発射される。

その速度は凄まじく速く、

とてもじゃないが知っていないと

明らかに被弾するだろう初見殺し。

数秒ほど掃射が続き、沈黙。

足音が聞こえ、中から1人の兎が出てくる。

「……………てるに、博麗の巫女。」

残り2人は……………見ない顔ね、名乗りなさい」

「……………名前はソラ。一応初対面じゃないけど」

「同じく初対面じゃないわ。ルーミアよ」

「……………えっ嘘？人喰い妖怪？」

じゃなくて……………あなた、何者？」

まあともかくこちらは覚えていない、と。

見覚えのある紫髪に赤い瞳、長い兎の耳が特徴的。

どこかやつれており、濃い隈が来ている。

彼女はこちらを警戒し構えようとするが、

それをてるが手で制する。

「私が探してた人間だよ。」

博麗の巫女もいるし、これなら……………」

「……………いきなり悪かったわね。」

私は鈴仙・優曇華院・イナバ。鈴仙でいいわ。  
てゐから話は聞きたのかしら」

「助けてほしい、としか言われてないわ。」

「言っておくけど面倒事なら無視するから」

「霊夢はこう言ってるけど」

「問題があるなら手伝わせてもらえると嬉しい」

「……………成る程、そういうことね。」

「助かるわ、取り敢えず上がってちょうだい」

鈴仙に案内されたのは、永遠亭の入口近くの客間。  
ちゃぶ台を囲んで座布団が敷かれており、  
彼女が茶を淹れてくれる。

「早速、本題に入ろうか。いいよね？」

「ええ、私は少し輝夜様を見てくるわ。お願い」

「はいよ」

てゐとやり取りを交わした鈴仙は

永遠亭の廊下を進んでいく。

「どうやら、てゐが話をするようだが……………」

「また輝夜は引きこもってるのか？」

「はっ、それならどれだけ良かったか」

「……………蓬菜の姫に、何かあったのね？」

てゐはオレの問いに鼻で笑う。

その苦い笑いにルーミアが聞くと、  
てるは今まで見たことないような真剣な顔で頷く。

「ああそうさ………不味いことになってる。

お姫様を人質に取られてるようなもんでね」

「………ごめん、心にもないことを」

「いいや、ソラに悪気がないのは分かってるよ。

お姫様の友達だしね」

「人質に取られてる、って言ってたわよね。

一体誰に？ あいつ、確か不死でしょうし

人質に取れるような奴はそうそういないわよ」

そう霊夢が聞く。

オレも2年前に輝夜と出会って仲良くなり

幻想入りしたというゲームと一緒にしたりしたが、

彼女は自分を除いた全ての時間を超極端に遅くする

能力を使えると聞いたことがある。

それに、年齢は何億とか言っていた。

実力的にも相当なものだろう。

霊夢の問いに、てるは一度眼を瞑り……

驚きの言葉を口にした。

「………月の連中さ」

「っ、月!?!」

思わず口に出る。

神社で襲ってきたあいつらのことだ。

だが霊夢とルーミアは平然としている。

「何を驚いてんのよ、

あいつを狙うような奴等は月しかいないでしょ」

「いやなんで驚かないんだよ!?!」

「普通に考えれば分かるでしょ。」

問題です、普段お高くとまってる

月人連中が地上で降りて来るなんて理由は?」

少し考える。

確かに神社で襲ってきた月兎たちは高圧的だった。

月人たちも、そうだとして…降りて来る理由、か。

「……何か、やらかした時、

もしくは落とされた、とか?」

「まあ、正解ね」

「何をやらかしたのかは聞かない方がいいか、

しかし……なんで落とされた月の連中に輝夜が?」

「それは——っ!?!」

言いかけたてるがバツと顔を上げる。

霊夢とルーミアも立ち上がり、外を向く。

「え、どうした?」

「敵よ」

「……遂に見つかったか。」

しかもこの感じは……あいつが来てるのか。

3人とも、私はお姫様を守る役目を言われている。

外の連中を……なんとか撃退してほしい」

「……先に行くわよ」

「あ、おい!」

霊夢とルーミアは外へと向かう。

オレも立ち上がって2人を追いかけて、

その客間を出ようとした時だった。

「ソラ」

立ち止まる。

てゐる顔は、焦燥と危機感に満ちていた。  
それを飲み込んで、てゐるは頷く。

「頼むよ」

「……………ああ、任せとけ」

頷き、外へと向かう。

そして、扉を開けて。

「……………っ!？」

喉元に刃を当てられたかのような感覚。  
背筋が凍てつき、息が詰まる。

「まさに、一石二鳥……………拠点と標的、  
両方を見つけられるとは思わなかったわ」

威圧感の主は、霊夢たちと遜色ないほどの少女。

刺客は、静かにその手の刀をこちらへ向けてくる。

「悪いけれどあの方の命よ。

貴方に直接の恨みはないけれど——」

視界に入る、霊夢たちも動けていない。

話をしているというのに、隙が無さすぎる。

「私の名は綿月依姫。

死んでもらうわ、我等が敵」